

—— 目 次 ——

仏教伝来—仏教系図書館の使命とは何か— …………… 135

和漢仏書の特質 …………… 143

大蔵経の歴史とその構成 …………… 150

第1回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

平成9年3月31日 発行

当 番 校 大 谷 大 学 〒603 京都市北区小山上総町
TEL 075(411)8123

第一回仏教図書館協会研修会

「仏教伝来－仏教系図書館の使命とは何か－」〈講演〉

大谷大学図書館長 木村宣彰 (教授・仏教学)

大学図書館は、これまで大学の学術研究の拠点として、教育および研究に不可欠な図書資料や学術情報を収集、整理し、これを教職員や学生に提供するという重要な機能を果たしてきた。また今日では、地域社会における生涯学習などの拠点としての図書館の使命が要求されている。更に、国際化、情報化の現代社会に適切に即応するためにネットワークの整備、各種のデータベースの充実などの機能も強く要求されている。本学でも情報ネットワーク、学内ランが設置され、図書の公開検索などに対応しようとしている。更にまた、今後は各大学等間でネットワークを構築し相互に図書情報、学術情報のために利用できるようにしなければならないであろう。

このように、21世紀を間近にひかえた今日、大学図書館を取り巻く状況は大きく変化し、このような環境の変化は、当然のことながらそれに伴って図書館は大きな変革を迫られている。

このようなとき、大学図書館、殊に仏教系大学の図書館に関係する者は、仏教の図書館がどういう機能を持っているのか、本来どういう機能を持たねばならないのかを十分に考えて時代の要求に即応していかなければならない。仏教系大学の図書館は、その特色ある個性や伝統を失うことなく、それを堅持しながら現代社会の変化に応じて、適切な情報を受発信する機能や能力をより一層高めなければならない。図書館も人間と同じく、それぞれの個性を守りながらその能力を高めるようにつとめなければならない。情報・通信に関する科学技術の発達した現代社会に応じるための能力を高めることによって、その本来の

仏教系図書館という個性や伝統を失ってはならない。

言うまでもなく、図書館には図書・資料をはじめとして、あらゆる情報を収集するという任務をもっている。図書館員(司書)は、図書をはじめとする様々な情報を収集するためには、まず、何よりも収集すべき情報の内容を十分に理解し、選別する能力を養わなければならない。

多様な図書・情報が氾濫している中で、我々大学図書館の一員としては、図書館を利用する学生や教職員あるいは社会人のニーズを的確にとらえて資料情報の評価、選別するという役割や機能が大切になってくる。選別して集められた情報を保存をし、整理をするという機能が要求されている。いつでも、誰でも利用できる情報を整理し、保存をし、提供することが大切である。我々は仏教系大学図書館の一員として、大学における研究や教育の心臓部を形成している。学生部や教務部の役割とはおのずから違いはあるが、研究・教育の支援というところで果たす役割は極めて大きく、その図書館の在り方によって、それぞれの大学の研究教育の死活が決まってくるといっても決して過言でないであろうと思う。

今日のお話のテーマを「仏教伝来」としたのは、実は仏教図書館の一員である我々の役割が仏教の伝来に関係した先達の課題と異なるものではないのではないかと考えたからである。二千数百年も以前にインドに興起した仏教が、やがて東アジアの端の日本に伝来し、そこに生きる人々に生きる指針を与え続けている。その仏教の伝来に関わった人々が、命

がけで果たしてきた役割は、実は、今日の仏教系図書館員が果たすべき役割に極めて近いものがあると強く感じるのがある。

仏教は今から二千数百年前インドで興起したわけであるが、インドと中国との間には世界の屋根と称される峻嶒な山々が遮り、過酷な大砂漠が横たわっており、両国の間で人的な交流を遮断していた。このような地理的な過酷な条件を乗り越えて、中国からインドに法を求め、インドから中国に仏教を伝える人々があつた。かくして、インドから中国に仏教が伝来し、東アジア全体に広がって行く。ここで東アジアというのは、中国を中心とする漢字文化圏、殊に漢訳經典に基づく仏教が人々の生き方や文化一般に影響を与えた地域を指している。

インドから中国へ仏教が伝わって来るには、大変な困難が伴っていた。中国の数千年の歴史の中で、異国の、異質の文化を採り入れたのはインドで起こった仏教だけであつた。現代の中国は勿論、様々な世界の文化や思想を受容しているが、過去の中国の文化史の中において、中国の文化とは全く異なった文化や思想を受け入れることはなかつた。その中国が、中世において異国の宗教であつた仏教を受け入れたということは、文化史の中で大事件であつた。仏教を中心とする交流が行われる以前のインドと中国はそれぞれが独自に固有の文化を形成していた。決して、インドと中国の文化を同じく東洋文化として一括することができないものであつた。中国の言語は表意文字の漢字に基づくものであり、文法が無いわけではないが、極めて単純な文法構成である。それは、漢字の置かれた位置によって文章の意味内容を規定している。それに比べて、インドのサンスクリットは大変緻密で複雑な語形変化を伴う複雑な文法を有している。それぞれの文化は、このような全く異質な言語でもって語り継がれていた。そして、中国の言語とは異なる言語で伝えられた仏教を、全く異質な中国の言葉に翻訳することは、今日我々が想像するよりも、はるかに困難を伴う事業であつた。たとえば人間の見方、人間観にしても、中国の古典、中国の伝統思想では人間を細かに分析をして考える

ようなことは余り認められない。ところが、インドは人間を細かに分析して考える。例えば、インドに興起した仏教では、人間を肉体と精神作用とに分けて、色・受・想・行・識というように五蘊に分析している。肉体である「色」と精神作用である「受」「想」「行」「識」というように感覚や、心の中のイメージや、意志など、人間の心理までもこと細かに分析して人間というものを捉えようとしている。このように、人間ひとつの見方を考えても全く異なった伝統があり思惟方法の相違がある。更に、時間・空間に対する見方にしても、やはり大変な相違がある。仏教が伝来する以前の中国の人々は、我々の生涯＝現世を中心にして時間を考えていた。中国では伝統的に過去・現在・未来の三世の中の、現世を中心として時の流れを考えていた。要するに、我々が生きている現世の有限の中で物事を考えるわけである。ところが、インドの人はそうではなくて現在、ただ今のこの時は過去から未来への悠久の時間の流れの中で考えている。晋の袁宏の『後漢記』には、仏教が伝来し三世の因果応報を知って「王公大人、死生報応の際を覩て愕然として自失せざるはなし」と記されている。今まで現世のこのことを考えていた中国の貴族たちが、三世のことを知りびっくり仰天したのである。

このように、文化の伝統を異にするインドと中国の間で仏教が伝来し受容された。仏教の中国伝来に関しては後漢明帝の感夢求法説をはじめとして様々な説がある。後漢の明帝が夢に金人をみて西方に仏教を求め、永平10年に迦葉摩騰と竺法蘭という人が洛陽の白馬寺にやって来て『四十二章経』というお経を翻訳したのが、中国の仏教伝来の最初だと信じられていた。これは最もよく知られた仏教伝来の伝説である。ところが、今日では『三国志』巻30に引用する『魏略西戎伝』の記事が仏教伝来を記した最も古い文献とされている。そこには、元寿元年、即ち紀元前2年に、天竺の大月氏王の使者の伊存という者が、中国にやってきて『浮屠経』すなわち「仏経」を口授したという。この後漢明帝の感夢求法説は、仏教が自然自然のうちに伝わったのではなく、明確に皇帝の意図によってもたらさ

れたことにしようとした仏教徒の意図によって作られた伝説である。

いずれにせよ、仏教伝来の当初は、文字で書かれた経典を持って来るということではなくて、記憶して来た経典を唱えて相手に授けるという形で伝わったわけである。

中国で本格的に仏教経典の翻訳が始まったのは、後漢の桓帝(146~167)の頃に洛陽に来た安息(パルティア)の安世高や、月氏の支婁迦讖によってであった。安世高は主に禅観経典を、支婁迦讖は初期大乘経典を翻訳した。その後、中国では数百年にわたり経典の漢訳につとめた。その努力は並々ならぬもので、383年に訳されたある論書の場合は、インド人の僧伽跋澄が記憶している梵文を読み上げ、曇無難提がそれを聞いて書き写し、仏図羅刹がそれを見ながら中国語に訳していく、さらに敏智という人が漢語に書き記すというように大変苦勞して翻訳がなされた。しかし、中国語を解さない僧伽跋澄にすれば、自分が記憶してきた通りに、正しく中国語に訳されたかどうか確かめることができなかったのである。

また、記憶して来たものを翻訳するのであるから、忘れてしまう場合や記憶している人が死亡する場合もあった。そうすると翻訳が途絶えてしまうことになる。『十誦律』の翻訳の場合には、弗若多羅という人が記憶してきたのを聞きながら鳩摩羅什が翻訳をしていたが、全61巻の訳が完成する前に弗若多羅が死んでしまい、途中で翻訳が途絶えてしまった。やがて『十誦律』をそらんじている曇摩流支という人がインドから来て、残りの三分の一を読み上げ、翻訳を完成させた。このような形で翻訳するので、訳経三蔵の苦勞は大変なものであった。

その後になると、梵本や胡本の写本を見ながら翻訳するようになるが、最初期の段階ではインドや西域からやってきた三蔵の記憶に基づいて訳すので、今述べたような思わぬ出来事がしばしば起ったことである。

三蔵法師のなかで、最も有名なのは鳩摩羅什と玄奘である。鳩摩羅什は、『法華経』や『阿弥陀経』などの翻訳で知られる大変に有名な三蔵であり、かつ名翻訳家であるが、意

外なことに、彼はインドの経典を中国の言葉に翻訳することなどできないと考えていた。仏陀の説かれた教え、インドの言葉で記された経典を、異国の文字に翻訳することなどとてもできない。鳩摩羅什は門下の僧叡に「翻訳をするということは、あたかもご飯を食べるとき、他人が囁んで咀嚼したご飯を食べるようなものだ。それは、単に味がないばかりでなく、かえって吐き気をもよおすであろう」と語っている。鳩摩羅什は西域の龜茲の生まれであるが、中国に来て漢詩が作れるほど中国の言葉に精通している。勿論、インドや西域の言葉にも通じている。しかも、言葉が堪能だというだけでなく、仏教の教理にも精通している。鳩摩羅什が訳した経典や論書を読めば、その力量が十分に知られる。多くの優れた経典の翻訳を残した鳩摩羅什が、実は経典の翻訳などはできないのだというのだから驚きである。しかし、翻訳についてそのように考えていたからこそ、そういうことを考えている鳩摩羅什だからこそ、中国の人々がよく理解できるように訳を工夫したのである。鳩摩羅什の翻訳は、後世の学者からしばしば創作だとか、あまりに達意的である等の批判を受ける。だが、羅什に限らず翻訳三蔵は、大変な工夫と努力をしているのである。

経典翻訳の際、その訳語についても様々な配慮がなされた。仏教は、ブッダが説いた教えである。しかし、ブッダの願いからすれば、仏教はすべての人々をブッダに成るようにする教えである。その仏教の開祖であるブッダをどのように中国の人々に伝えるのか。そのために経典を翻訳する三蔵法師は、大変な工夫と努力をしている。ブッダとは、目覚めた人の意味であるが、単に目覚めた人、「覚者」と訳してしまえば、私たちが眠りから覚めるのと同じように理解されてしまうかもしれない。それではブッダが誤解される可能性がある。そこで仏教の開祖であり、仏教の理想とするブッダを正しく中国の人々に伝えるにはどのようにしたらよいか。そこでインドの発音の通りの漢字の音で表記したらどうか。そこでブッダに近い音の漢字の「浮屠」や「仏陀」と表記するようになった。これを音写という。ただし浮屠では日頃、よく使う漢字で

あり、しかも意味が芳しくない。そこで日常あまり使用しない漢字の方がよいということになる。仏陀の仏も陀も日常あまり使わない漢字なので異国の言葉を写すのに適している。「仏」という漢字は、ほのかとか、かすかという意味である。「陀」という漢字は、ななめという意味である。この仏陀の漢字の通りの意味からすれば、ほのかにななめということになる。これでは意味が通じないから、逆に音写語であることが理解できる。ニルバーナを滅と訳さずに「涅槃」と音写し、プラジュナーを智恵としないで「般若」と音写したのも、同じような配慮がなされているのである。

そういう三蔵法師達の並々ならぬ努力は、仏教を十分に評価し、正しい教えを選別し、それを中国へ伝え、保存し、万人に提供しようという願いによるものである。このことは、我々仏教図書館に関わる者が果たさねばならない役割と等しいといえる。即ち、仏教図書館が負っている大切な機能とは、仏教書を正しく評価し、選別し、保存し、提供するということである。かつて仏教伝来に関わった三蔵たちの願いと役割は、まさしく仏教図書館に働く者の願いと役割に通じるものがある。

中国仏教の初期の訳経事業は、このような困難を伴うものであった。三蔵の苦勞にも拘わらず、未だ不十分なものであった。中国の仏教者にすれば、仏教を学びたくて経典を読んでも意味が通じない場合がある。そこで、経典の翻訳が開始されてからほぼ100年ほど経過した260年には、漢人僧の朱子行という人が、インドに行き自ら経典を求め、正しい仏教を中国にもたらそうと一念発起してシルクロードを西へ向かった。そしてコータンに至り、そこで『般若経』の原典を入手した。朱子行は全部で60万字に余る『般若経』の原典を全て写経した。その頃、朱子行は既に80歳を過ぎており、コータンで客死した。折角写経した『般若経』を中国にもたらすことができなかつたのである。そこで、コータンの人に頼み、中国の洛陽に届けてもらった。この朱子行こそは、中国から西方に法を求めた最初の求法僧である。その後、中国の人に仏教というものが、直接に意識され始めた3世

紀頃から、盛んに中国の人がインドへ仏典の原典を求めて旅立つことになる。我々がよく知っている法顕三蔵は、399年に律蔵の不備を嘆いて数人の仲間とともに洛陽を出発し、インドに向かった。途中で死んだ者や引き返した者があり、無事にインドまで到着したのは僅か2人のみであった。法顕は、インドの経典を書写するためにはインドの言葉を学ばなければならないと、既に古稀に達する年齢であったが、サンスクリットの勉強を始め、3年間でそれを修めた。律蔵や経典を写すには、どうしてもインドの言語を学ばなければならないのであった。春秋に富む若い学徒が、外国語を学ぶのとは異なり、70歳を越えた老僧が、インドの経典を書写するために、インドの言語の学習を始めたのである。ところが、ようやく3年間でサンスクリットの学習を終えて写すべき律蔵や経典の原典を探したが、それが見当たらない。というのは、インドでは伝統的に神聖な宗教文献を紙に写すという伝統がなかったからである。聖典も紙に写すと「もの」になってしまう可能性がある。また、紙であるから水火の災害に遭遇するかもしれない。神聖な教えも紙に書写してしまえば、不注意に踏みつけてしまうかもしれない。神聖な教えを最も確かに保持するには、自分の頭の中に記憶しておくのがよい。しかし、仏教徒は、仏教の教えを多くの人にひろめた方がいいと考えて経典の書写を勧められるようになるが、法顕がインドに出かけた頃の北インドにはまだ紙に書いた経典は少なかった。3年間も梵語を学習をし、経典を写そうとしたが、容易に原典を見つけることができなかつた。たまたま祇園精舎で『摩訶僧祇律』というテキストを手に入れて、それを写した。

仏教図書館に関わる者が、仏典を収集し、保存しようという情熱も、高邁な法顕の志に及ばないとしても、これに等しいものでなくてはならないであろう。

法顕の時代（4世紀）から7世紀の唐の時代までに多くの僧がインドに法を求めた。唐の時代には、義浄が玄奘や法顕のインドへの求法の旅に感銘して求法の旅に出発する。法顕三蔵はグループで旅にでたが、玄奘三蔵の

場合は時代の制約があり、唯一人を出発した。インドへの旅は大変に危険を伴うので、多くの場合数人乃至十数人のグループで出かけた。唯一人を出かけた玄奘の場合は例外的である。インドに旅立った者の中で、成功をおさめるのは数人であり、大変に厳しい困難な旅であった。自らインドに旅した義浄は、同じようにインドに求法の旅をした僧の伝記である『大唐西域求法高僧伝』を編纂している。そこには都合65名ほどのインド求法の僧が記録されているが、そこに記された65名のうち、インドに向かう途中で既に25人は死亡し、25人は困難な旅のために挫折し中国に引き返している。無事にインドまで着いた者は僅かに15人に過ぎない。その15名の者がインドでの学びを終えて帰国の途に就くわけである。しかし、帰国の途中で4人が死亡し、6人が行方不明になり、無事に中国に帰り志を遂げた者は実に5人に過ぎないのである。義浄が知ることができた有名な僧に限って見ても、成功率は実に1パーセントにも満たない。このほかに、無名の求法僧は数限りなくいたことであろう。にも拘わらず、多くの人々が中国を出発し、インドに仏教を求めたのである。それは仏教を学びたいという燃えるような志の然らしめるところであった。

その意味からも、唯一人でインドに旅立ち成功をおさめた玄奘の求法の旅は、偉大であった。玄奘はインド留学とその往復に要した年限は17年になる。この年数に我々は驚かされるが、実はそれよりも長い年数をインドで過ごした僧が沢山いたのである。たとえば、智猛という僧は37年間を費やし、悟空三蔵は40年間を閲した。これはひたすら正しい仏教のお教えを伝えたいという熱意によるものであった。そういった人々の努力によって仏教が伝来し、東アジア全体に仏教が伝わって行ったのである。

その中の、成功した僅かな僧についてのみ我々は知っているに過ぎない。志の半ば倒れた無名の僧のことは忘れてはいるが、成功した人も、そうでない人も、共に仏教を伝えたいという厚い志を有していたことを忘れてはならない。

そういう方々の努力によって仏教が伝来す

ると、仏教經典を整理し、分類することが必然的に要求される。中国仏教において最初に翻訳された仏教經典の整理を行い、その記録を残したのは釈道安(312~385)であった。彼の伝記を読んでもみると、色は浅黒く醜い人であったという。容姿が醜いので、師匠から疎んじられて十分に教えが受けられなかった。先生から認められないからといって、道安はいじけたり恨んだりせずに、ひたすら仏道に励んだ。それは、とりもなおさず仏教を求めるといふ志を失わなかったからである。そして、やがて仏図澄という先生に出会い、師事することになる。そこで道安は偉大な才能を発揮することになるのである。道安が編纂した經典目録は仏教史上の偉大な功績である。

中国における經典翻訳は、後漢の時代に洛陽に來た安世高や支婁迦讖によってであった。そして徐々に漢訳された經典の数が増えていった。經典が増大すると、どうしてもそれを整理しなければならない。そこで、道安は翻訳された經典を調査し、収集し、經典の目録を編纂したのである。道安の目録編纂の作業は大変に真摯なもので、自ら全部の經典を取り寄せ、自ら読み、翻訳者や經典内容を一々確かめながら目録を編纂していった。今日、私達が後漢の時代の經典の翻訳について知ることができるのは、全く道安の目録のお陰である。道安の編纂した目録は『綜理衆經目録』という名前であるが、実にこの目録によって、中国の古い時代の仏教の様子を知ることができるのである。この道安の目録は残念ながら既に散佚してしまったが、梁の僧祐が『出三藏記集』という目録を編集し、その中に道安の『綜理衆經目録』を引用しているので我々はそれを知ることができる。

道安は、その目録の中に「疑經類」という分類を設けている。そこでは本当の經典と疑わしい經典とを厳密に区別している。現に疑わしい經典が存在するので、そのような經典の目録を作ったのである。その中で道安は、次のようなことを語っている。農民が田んぼの中に稲以外の草を生やしておけば恥づかしいことである。また、金庫の中にお金ではない石ころが詰まっているとすれば、それは大

変に奇妙なことである。稲と草との区別がつかない、お金と石ころの区別がつかないようでは大変に恥ずかしいことである。仏教徒として、そういうことがあってはならないと警告しているのである。

道安は、自ら仏教の伝統に預かる者として「清濁の流れを交えず」と語り、清流と濁流は区別しなくてはならぬ。龍と蛇とは区別しなくてはならぬ。もし正しい書物を選別せず、正しい仏教を弁えず、疑わしい書物を放置すれば、獅子身中の虫のようにやがて仏教を滅ぼすことになる。そこで仏教として疑わしい経典を調査し記録したのである。このことによって、将来、仏教を学ぶ人のために役立つようにしたい。このような願いをもって道安は目録を編纂している。

中国の古い時代の経典目録に道安の『綜理衆経目録』があるが、日本にも興福寺の永超が編纂した『東域伝灯目録』という目録がある。仏教を学ぶ者はよくお世話になる目録である。この目録は、永超が81歳の時に自ら一々校正し、完成し、青蓮院に献上したものである。永超はこの目録に当時存在した書物については一々所在を記し、また、他の目録によって記録したものについては典拠を示している。このような先人の努力によって、日本の奈良時代の仏教を知ることができる。

このような仏教の歴史において、仏典の記録に関わった人々の努力は、今日の新しい図書館で働く図書館員の使命と全く等しいものである。即ち、中国の道安や僧祐、日本の永超、或いは高麗の義天などは、皆、仏教の資料を厳密に評価し、選別し、整理し、保存している。近代的な図書館の中で、殊に仏教の図書館に携わる我々は、資料を評価・選別・整理・保存などにつとめ、それをあらゆる人々に、何時でも、何処にでも提供しなければならない。そういう役割を我々は果たさねばならない。

いずれにせよ、先達の大変な苦勞があつてはじめて東アジア端の日本にまで仏教が伝わり、その仏教が我々の文化の中で大きな影響を与えている。

仏教が日本の文化に影響を与えたごく卑近な二、三の例を挙げることにしたい。我々は、

日常、日本語でものを考え、かつ書いている。その日本語の五十音の「アイウエオ」は、仏教とともに伝わってきた「悉曇五十字門」に拠るものである。悉曇五十字門は『涅槃経』など多くの経典に説かれている。また、「いろは」は、やはり有名な経典の『涅槃経』に説かれている雪山童子の求道物語に拠っている。雪山童子という若く志の豊かな青年が、ヒマラヤの中で修行をしていた。ところが、どこからともなく「諸行無常、是生滅法」という言葉が聞こえてきた。あらゆるものはみな変化するものであるとの声が聞こえてきた。まわりを見渡すと、そこに鬼（羅刹）がいた。鬼（羅刹）に向かってあなたが言ったのかと尋ねると、そうだ私が言ったと答える。それでは後の言葉を聞かせてくれと言うと、鬼（羅刹）はお腹がすいてこれ以上は話することができないと答える。食べ物を取って来るから教えてほしいと言うと、鬼（羅刹）は、私は、人間の肉しか食べないし、人間の暖かい血しか飲まないと語る。雪山童子は、じゃあ私の身体を食べてもいいからどうか後の言葉を聞かせてほしいという。そこで、雪山童子は自分の身体を与えることを条件に、羅刹から「生滅滅已、寂滅為楽」という言葉を聞く。我々は生滅変化に執られて生きているが、それを超えた世界にこそ本当の人間の安らぎがあるということを教えられる。この『涅槃経』の雪山童子の求道物語に、我々の先輩は非常に感動した。そこで、法隆寺の玉虫厨子にもこの雪山童子の「施身問傷」の絵を描いた。この『涅槃経』に出てくる雪山童子の求道物語によって作られたのが「いろは」である。この「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の「無常偈」は漢字ばかりであり、耳で聞いてもよく意味が分からない。そこで、これを分かりやすく日本語に翻訳したのが「色はにほへど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ、……」で始まる「いろは歌」である。こうして「いろは」は子供から大人まで老若を問わず、広く知られるようになり、知らず知らずに仏教の教えに親しんでいったのである。

「東海道五十三次」も、『華嚴経』が典拠である。善財童子という一青年が、志を抱き悟

りを求めて、五十三人の善知識を次々に訪ねて行く。この『華嚴経』の物語に拠ったのが東海道五十三次である。江戸から京都への旅は、ただ単に物見遊山ではなくて、自らの生き方を確かめるための旅であり、あたかも善財童子が法を求めたと同じようでありたいと願ってのことなのである。

我々の先輩は、仏教を単に葬送儀礼や法事のためだけでなく、自分の生活に生かし、人間の営為である文化の全体に反映させていたのである。従って、おおよそ仏教と関係ないような言葉にも仏教の思想が反映している。例えば、「道楽」という言葉がある。人には様々な道楽がある。釣りや盆栽や、様々な道楽がある。仏伝を説いた『仏本行集経』などの経典には、「仏が道楽を得た」と説いている。仏陀が道楽をされたとはどういう意味か。道楽とは何か。ここでいう「道」というのは、悟りのことである。中国の人は、仏陀の正覚の悟りを中国伝統の言葉である「道」という語で表記した。そこで、長い修行の果てに得た悟りの歓び、正覚の感激を道楽という言葉で表した。釈尊は出家をして6年間の修行をなし、ついに35歳の12月8日の暁に菩提樹の下で悟りを開く。この感激は何にも代え難いものである。悟りの感激は、私たちが感じる日常の楽しみとは比較にならないものである。そこで、私は私達にも仏と同じような道楽を求めよと教えられる。しかし、仏の悟りの歓びは如何に素晴らしいものであったとしても、我々は容易に悟りを得ることはできない。どれだけ素晴らしいものであったとしても、自分の手に入らないものであれば、その歓びを味わうことができない。そこで凡夫は、まあ、手近なところでパチンコでもして、道楽をしましようということになる。このように道楽という言葉が生活の中に取り入れられる。これと同じような言葉に悟りを開いた人の内心を意味する「内証」がある。悟りを開いた人の内心は、同じく悟りを開いた人にしかわからない。他人から窺い知ることはできないということから、内証が秘密を意味するようになる。我々の家の入り口を「玄関」という。これも単に出入り口というのではなく、玄関というのは仏教の言葉に拠っている。玄

関は、「玄」すなわち奥深いところの入り口という意味である。私たちの家の出入り口も、実は奥深い仏教の悟りへの入口として玄関に準えているのである。

先日、テレビに「日光」の「華嚴の滝」が映っていたが、この「華嚴の滝」は言うまでもなく『華嚴経』に基づくものである。天台宗の教相判釈の「五時八教」という難しい教義に基づいているものである。「阿含の滝」、「般若の滝」というものもある。日光の名所の華嚴の滝は、天台宗の教義によって『華嚴経』から来ているが、更に「日光」という地名も、実は仏教の教義に基づいている。即ち、日光は観音菩薩の住所の名なのである。観音菩薩の住所を、インドの言葉のサンスクリットでは、「ポタラカ」という。それを漢字で補陀洛と表記し「ふだらく」と読む。その補陀洛がやがて訛り「ふたあら」となり、二荒と漢字で書くようになる。二荒を訓で読めば「にこう」となる。そこで、二荒の荒が漢字の意味があまり芳しくないのので、「にこう」の音を日光の漢字で表記するようになり、今日の日光になる。即ち、観音菩薩の霊場であるポタラカが補陀洛となり、二荒となり、日光となったのである。ちなみにチベットのラサにあるポタラ宮殿も、この観音菩薩の住所のポタラカと語源は同じである。

また、地名の日光が実は仏教の言葉であり、サンスクリットに基づくものであるが、地名のみならず、よく知られている「カルピス」という乳酸飲料の名前もサンスクリットによっているのである。カルピスの会社を設立したのは、三島海雲という大阪の真宗の寺院の出身の方である。後には、財団を作って仏教聖典の編纂など援助をした人である。三島海雲は若くして中国大陸に渡り、大きな成功をおさめた。やがて帰国してから、かつてモンゴルで飲んだ乳酸飲料を日本でも作りたいと考え、それを完成させた。そこで彼は、自分が作った乳酸飲料に何という名前を付けようかといろいろな人に相談した。その相談にのったのが大正大学の渡辺海旭という先生であった。渡辺海旭先生はサンスクリットに詳しく、また『大正新脩大蔵経』の編纂に中心的な役割を果たされた先生である。その渡辺先生は

三島海雲氏にアドバイスされた。牛乳からできた乳製品は、仏教の經典の中にもしばしば出てくる。仏教の中に「五味」という言葉がある。乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の五味については『涅槃經』に説いている。そこで渡辺先生は、三島海雲氏の製造した乳製品は、まさしくお経に説いている最高の乳製品である「醍醐味」である。そこで、この「醍醐味」を意味するサンスクリットである「サルピス」にしたら良いでしょうとアドバイスした。ところが、大正時代は、まだ日本全体の栄養状態が良くなく、カルシウムの必要性が叫ばれていた。そこでカルシウムの「カル」とサルピス「ピス」を合わせて「カルピス」という名前にしたのである。そのカルピスのキャッチフレーズを「初恋の味」とした。聞くところによると、カルピスの売れ行きが悪くなると「初恋の味」のコピーを使うと、たちまちに売れるようになったということである。このように我々の生活のなかの飲料水にまでも仏教のことに基づくサンスクリットが生きているのは意外なことである。

仏教は東アジア全体の文化に絶大な影響を与えている。その仏教の伝来に関わった多くの人々の苦勞を思い、感謝しなくてはならない。遙か彼方のインドまで仏典を求めて旅に出た法顕三蔵や、玄奘三蔵や、漢訳された仏教經典を整理し目録の編纂に努力した中国の道安や、我が国の永超をはじめとして、經典の研究につとめ章疏を著し、人々に流布せしめるように尽力した仏教者の志と生き様は、まさしく近代の仏教図書館が背負っている役割と異なるものではなかった。我々は現代の整備された図書館で働いているが、その役割は仏教の典籍の収集し、整理し、あらゆる人々に提供することを役割としている。これは玄奘や道安らが目指していた役割と異なるものではない。仏教図書館の館員は、まさしく仏教伝来に関わった人々の伝統に預かる者である。今日、仏教図書館に働く我々は、そういう先達の流れ、伝統に預かっている人間である。仏教伝来につとめた先達たちのご苦勞を知り、その言葉では言い表せない努力に感謝することが必要ではなからうかと思うのである。

ここで改めて、我々は、21世紀に向かって仏教を正しく評価し、選別し、保存し、あらゆる人々に、いつでもどこでも、仏教の正しい教えを提供しなければならない。仏教は仏陀が菩提樹の下で真理に目覚められた。釈尊が理法に目覚められたことは、実に尊いことである。この宇宙が、太陽が、月が、一定の理法に従って運行しているように、人間の生き方にも、一定の理法＝ダルマがある。太陽の運行が、自然の営みが、理法に則っている。太陽が間違っただけで西から出ることはないが、人間の営みには過ちがある。人間は往々にして理法に背き、過ちを犯す。人間の過ちを訂正し、人間の苦惱を解決するにはどうしても、拠り所となる理法がなくてはならない。是非とも仏教がなくてはならないのである。

我々が、図書・資料や情報を集め、その整理をし、それを何人の求めにも応じ、提供し準備することは、すなわち、仏教図書館の役割や活動は、仏教伝来に関係し多くの人々の志を生き身をもって生きること他にない。仏教の伝統に預かる我々の任務は、これから21世紀に向かって益々重大になってくるであろう。

私は、図書館に着任してまだ1ヶ月あまりの若輩ではありますが、仏教伝来を歴史を振り返る時、今の様なことを強く感じる次第である。

第一回仏教図書館協会研修会

和漢仏書の特質〈講義Ⅰ〉

横 田 恵 (図書館課・参事)

今会の趣旨は、仏書を扱える人材を養成するという事、その第1回目、初歩、入門という意味合いが強いということでしたので、何か話をすればよいと思っておたわけですが、手許のレジメをみて、「これは、弱ったなあ」と思ったんですが、本日まで参加の方々の名簿をみてみると、かなり経験年数の豊富な方もいらっしゃいますし、また二、三お名前を存じている方も、非常に仏書には造詣の深い方がいらっしゃいますので、「これはいい加減なことはいえないな」と思っております。さらに加えて、レジメの方を見ますと、第2講目の平塚先生のお話と非常に重複するところが多いようで、相前後いたしておりますので、前の方の大蔵経の成立については、殆ど割愛させていただいて、後半の方の話をしようと思われました。それから、日程表に実習を含むように書いてございますが、特に実習、演習というのはございません。隣の会議室に大蔵経を始め図書館から貴重書を展示しておりますので、それを見ていただくことを、実習に代えるような形で、展覧を見ていただいたら結構かと思えます。

我々というか、仏教の側から申しますと、内典、外典という言葉を使います。仏教関係の典籍を内典といいます。仏教以外のものを外典といっているわけですが、外典は、例えばインドにおいてはバラモン教の四ヴェーダ、4種類のヴェーダなんかですが、中国で申しますと儒教とか道教、老荘儒墨などいわゆる諸子百家の書物、そういうものが仏教から申しますと外典であります。内典は仏教の典籍の全体、総称した言葉ですので、中国の(このレジメにも書いてございますが)唐の

道宣の『大唐内典録』とか、あるいは日本でも、東大寺の凝然に『内典塵露章』という書物がありますように、書名の中にも内典という言葉が使われることがわりとあります。そういう内典、仏教の文献というものは、基本的には「経」「律」「論」の3つに分類されます。(レジメの2ページにその辺のことは書いておきましたが) 仏陀の教説、あるいは教説とされるものを記したものが「経」でありますし、僧伽の集団生活を営む上での僧侶の生活基準を律したものの、個人の行為を規制した禁止条項とか、あるいは僧伽の集団の運営規則というものが「律」であります。それから経を注釈・解釈したものが「論」であります。その3つに大別されます。そういうものを集め集大成した形が、それぞれ「経蔵」、「律蔵」、「論蔵」と呼ばれるものになります。それを合わせて「三蔵」という言い方をしますが、ゾウ、漢字では蔵という字を充てておりますが、サンスクリットではピタカであります。ピタカは籠、容れ物、容器といったような意味であります。ここでは単に容れ物だけではなくて、そこに入れられる、収められた内容そのものをも総括してピタカ、蔵と漢字では訳しておりますが、ピタカと呼んでおります。トゥリ・ピタカ、三蔵ですね、それらは、論蔵の成立は経蔵、律蔵に比べて少し遅いわけですが、いわゆる原始仏教、南方仏教において三蔵という形がつくられてきます。「大蔵経」という呼び方を中国ではするわけですが、三蔵に含まれる經典類が中国に伝わって翻訳されていく。中国では、「一切経」とか「大蔵経」とかいう呼び方をいたします。ところが三蔵と申しましても、実際に

は三蔵に収まり切れないものもあったようでありまして、四蔵とか五蔵とかに分別する人達もあったようであります。ゾウゾウというのでしょうか、ザツゾウ(=雑蔵)ですね、三蔵プラス雑蔵で四蔵という考え方もありますし、大乘經典というものが進みまして、密教関係のものも入ってくる関係で、呪文の呪、呪蔵とか禁呪蔵とかいうのを含める、あるいは、大乘のものを集めて菩薩蔵といういい方をして、いろいろ四蔵とか五蔵とかの考え方を考える人達もあったようであります。原始仏教の經典はパーリ語三蔵という形で伝わっておりますが、これには大乘經典は含まれておりません。チベット語に訳されたものがチベット大蔵經、中国に渡って漢語に訳されたものは漢訳大蔵經、チベット大蔵經を基にして、モンゴル、蒙古語にも訳されておりますし、満州語にも訳されております。中国の端に栄えました西夏という国がありますが、西夏語にも訳された大蔵經がございます。漢訳大蔵經は漢字文化圏の朝鮮にも渡っておりますし、日本にもそのまま渡ってきておまして、我々漢字を使うものにとっては、漢訳大蔵經が一番身近に親しみやすいものであります。漢訳大蔵經の中でも、後の講義にもありますが、中国で大蔵經というものが印刷されて、宋の時代から大蔵經がしばしば印刷されます。日本でも、江戸時代に天海というお坊さんが出まして、いわゆる『天海版大蔵經』と、日本での大蔵經の完成した最初のものでありますが、そういうものがございます。近代になって『大正新脩大蔵經』というものが印刷されました、これが現在一番我々が使い易い、身近に使っている、日常使っている大蔵經であります、その構成という形で各部を見てみます。

阿含部	本縁部	般若部	法華部
華嚴部	宝積部	涅槃部	大集部
經集部	密教部	律部	积經論部
毘曇部	中觀部	瑜伽部	論集部
經疏部	律疏部	論疏部	諸宗部
史伝部	事彙部	外教部	目錄部
統經疏部	統律疏部	統論疏部	統諸宗部
悉曇部	古逸部	疑似部	凶像部
別巻・昭和法宝総目録			

『大正新脩大蔵經』の構成を見ながら、漢訳經典の話を進めていきたいと思えます。

『大正新脩大蔵經』は、先程、木村館長のお話にありました渡辺海旭という人や高橋順次郎らが中心となって、大正13年から刊行が始められた日本での大蔵經であります、中国でそれまでにありました目錄類に見られる漢訳大蔵經の分け方と少し違った形で、經典の歴史的な発展の順序なんかを加味した形で、内容に基づく新しい分類で、それを順序立てておられるかと思えます。古い大蔵經は一番最初が「大般若波羅蜜多經」であります。般若部のものが最初にきておりますが、『大正新脩大蔵經』では阿含部、本縁部とあって、原始仏教の四阿含、仏陀の生涯、仏が過去永劫に種々の生を受け菩薩道を行ぜられた故事に基づく本生譚、そういうものを説いたものが本縁部にあたりませんが、そういう原始仏教関係のものが最初にきております。それから般若部、法華部等になるわけですが、般若とは「智慧」と訳したら分かり易いかと思えますが、般若に属する部類の經「大般若波羅蜜多經」及びその別出經典、並びに分かれてきた支派の經典、そういうものが含まれた般若部、それから法華に属する部類、「妙法蓮華經」及びその別出經典、並びに支派の經を集めた法華部、華嚴に属する部類、「大方広仏華嚴經」及びその別出經典、並びに支派の經を集めた華嚴部、さらには、菩薩の修行や授記に関する49の独立の經典を集めて、宝の集積になぞらえて「大宝積經」と名付けられる宝積に関する宝積部、「大般涅槃經」「大般泥洹經」等涅槃に属する部類の涅槃部、「大方等大集經」等を収める大集部と続きます。この般若、華嚴、宝積、涅槃、大集といったものが、いわゆる「五大部」と言われるもので、大乘經典中における五種の大部の經を分別した中国の唐の智昇の『開元録』に基づいた五大部という考え方でありますが、後には、先程の木村館長の話にも出てきましたが、天台智顛の「五時八教」という教判に基づいた「法華經」を最勝の教えとして位置付けるための教義体系が確立して、法華というものが重視されますと、華嚴、方等、般若、法華、涅槃という「五大部」の考え方も生まれてお

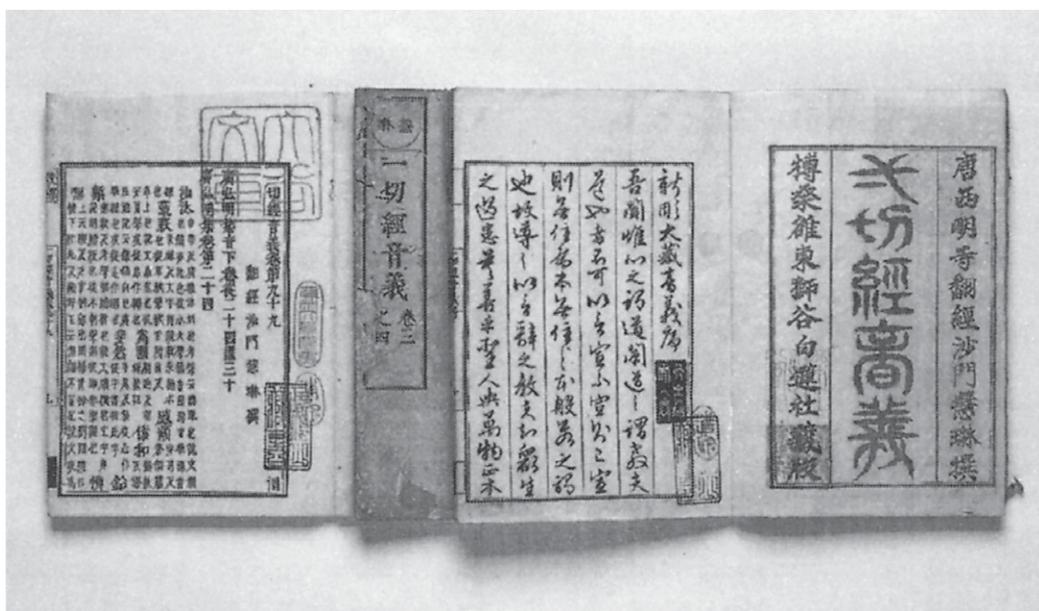
ります。そういうものを加味した形で、『大正新脩大藏經』では般若部、法華部、華嚴部、宝積部、涅槃部、大集部、經集部、そういうふうにならべてあります。それから、中国での訳経事業、訳経史の上からは後期になります。7世紀以後、密教関係の經典が不空らによって訳されておりますが、密教の「大日經」とか、「理趣經」とか、「金剛頂經」、そういった密教の後期大乘經典を集めたものが密教部であります。そこまでが經であります。それから律部、律部は先程いいましたように、教団(=僧伽)の運営規律、比丘・比丘尼の行為を規定する規則、教団内部の戒律等で、原始仏教、南方仏教の方では戒律を厳重に守っておりますが、大乘仏教が伝わってからは殆ど新しいものが整っておりませんので、漢訳ではそれほど量は多くございません。それから釈經論部というのは、インドの修行者である菩薩、龍樹とか天親、無着とかの菩薩、それぞれ龍樹菩薩とか天親菩薩とかいっておりますが、そういう人たちの經に対する解釈、注釈の書物、これが釈經論部というものです。それから毘曇部も同じようなインドの尊者たちの論書、中觀部、瑜伽部、論集部、それもインドの尊者の著作、三論学派とか、瑜伽行派とか、各部派の論書等が含まれております。論集部までがインドで撰述されたもの、いわゆるインド撰述といういい方をしてありますが、そういうものであります。それから、そのあとの經疏部、律疏部、論疏部、これが中国撰述というふうになっております。仏教が中国に伝わってから、中国人が、中国の坊さんたちが經、律、論書に対して注釈や解釈を加えたもの、そういうものが収録されております。それから仏教が中国へ入ってきますと、それぞれ經典を解釈した人、論述を加えた人、そういうものを論じた人、その人のそういった説を奉じた人々、そういうグループ的なものを生じてきますと、いわゆる宗、何々宗という宗ですが、宗派が生まれてきます。そういう宗派、諸宗の人々の書物が諸宗部に入っております。それから史伝部、事彙部、外教部、目録部と続くわけですが、『大正新脩大藏經』は全部で100巻でございますが、インド撰述部、中国撰述部と合せまして、こ

の目録部までで55巻あります。第56巻以降が日本人の撰述になる部分であります。今までの中国で編纂された漢訳大藏經ですと、インド撰述、中国撰述が主であって、勿論日本人の著作は含まれておりません。『大正新脩大藏經』では、日本に仏教が入ってから日本人の坊さんたちの著した著作を多数含めて大藏經として刊行しております。それも1つの特徴であります。第56巻以後29巻分、第84巻までが日本撰述部であります。その分が、續經疏部、續律疏部、續論疏部、續諸宗部、悉曇部に相当するところであります。それから、今世紀の初めに中国敦煌から写經・文書の類が多量に発掘されております。いわゆる敦煌文書とか敦煌遺書とか、あるいは敦煌写經とかいっておりますが、そういうものの仏教関係の散佚した典籍、偽經などの写本類が発見されて、古逸部・疑似部というところに1巻かためて収められております。これで85巻。普通『大正藏經』は85巻というふうにも申しますが、さらにそれに図像部というのが12巻ついております。これは、いわゆる仏・菩薩の像を表した図像に関するものを集大成しておりますが、12巻。それが加わって97巻になりますが、それに付録の形、続刊の形で、別巻として『昭和法宝総目録』3巻が出ます。大正13年に始まった『大正藏經』も、この時は年号が変わって昭和になっておりますので、『昭和法宝総目録』というふうにして昭和の年号を冠しているわけですが、『大正新脩大藏經』の一部に数えられている別巻であります。この目録3巻を加えて、『大正藏經』は全100巻です。そこには、各版の大藏經の目録とか、あるいはいろんな寺院の所藏經典目録等、日本での大藏經に関する仏教目録を多数収録いたしておりますので、これを見ますと大体どんな大藏經がどこに所藏されたかということが窺えます。

先程のお話にありましたように、仏教が中国に伝わり、サンスクリットあるいは周辺の国々の言葉になっておったテキスト、それは書いたものでなくて頭の中に収まって伝えられたものもありますが、梵本とか胡本とかいう言葉が仏教史の書物なんかを見られた時に出てくるかと思いますが、サンスクリット

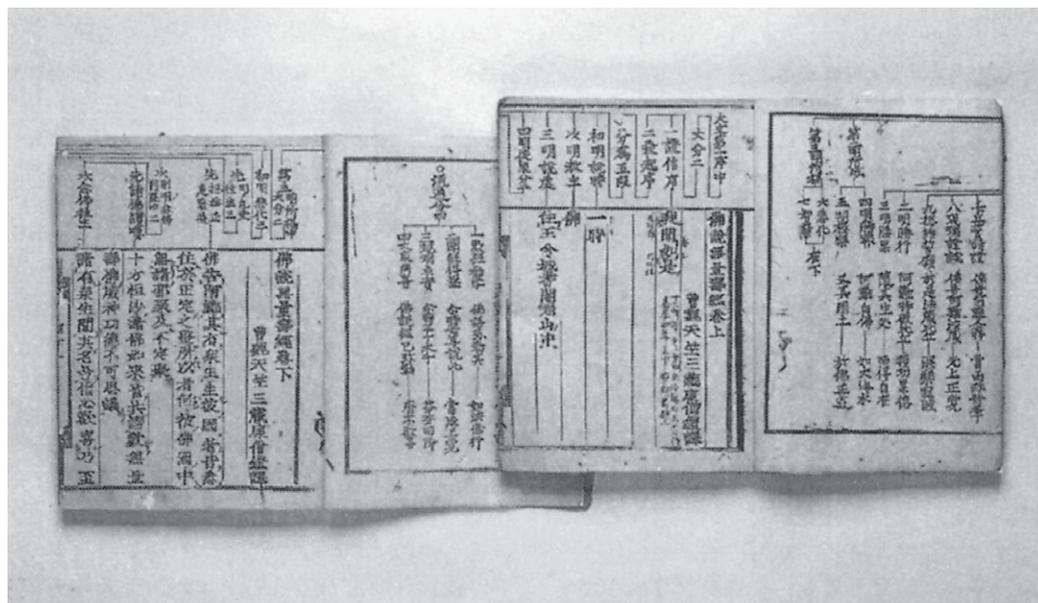
原本、それから周辺の国々の、いわゆる胡国の言葉、言語で撰述筆写したテキストがありました。訳経者の非常な努力によって、多数の経典が漢訳されます。後漢の時代から元の時代までおよそ1000年余の訳経事業が続いてありますが、いろんな原本から訳された、あるいは胡語には通じているが中国の言語にはあまり通じていない人、中国語は勿論中国の人で達者だけれど、胡国語にはあまり通じていない訳者などということもあります。あるいは伝わってきたテキストが色々違う、訳語の不統一とか、誤った写本、誤訳的なものが生じてきたりして、不統一な面も多々あったことであります。また、仏教の経典というのは忠実に伝わってきても、その意味が判らないともうひとつなんですが、私も寺の者ですが、檀家へお参りにいって漢訳の仏典を棒読みにいたしますから、一般の人には何が何だか判らないということがあります。不幸なのでしょね、日本が漢字を使っておったものですから、そのまま入ってきた漢訳経典を受け入れてしまった。日本が漢字を使っておらなければ、インドの経典が中国に伝わって漢訳されたように、日本でも日本語訳されて、今の一般の人々には非常に判り易い経典にな

ったかもしれないですが、漢訳経典をそのまま受け入れてしまった。中国でも、ただ読むだけでその意味が詳しく判らないと、正確にその仏教経典を受け入れたことにはなりませんので、音義と、仏典をよむための辞書のようなものですが、音義というものが編纂されます。音義は何も仏教に限ったことではないので、難解な漢字の字形、字音(=発音)、字義(=意味)ですね、字の形や読み方、意味等を解明した典籍が音義と呼ばれるものですが、仏教に限らずに中国の史書や経書、そういうものに関する音義類は早く作られておりますが、やがてそれが、仏典の解説にも適用される形になったわけで、南北朝の時代に『十四音訓叙』とか『一切経音義』とか、そういう名前の書物が作られたというふうに記録されておりますが、この時代のものは現存はしていません。現存する音義書では、唐代に玄応の『一切経音義』というものが25巻作られておりますし、さらに同じ唐代に慧琳という人が100巻に及ぶ『一切経音義』というものを作っております。どちらも『一切経音義』ですので、区別するために、「玄応音義」「慧琳音義」というふうに略称しておりますが、仏典を読むための音義書がございま



唐・慧琳撰『一切経音義』(和刻本)

『科文佛説無量壽經』(日本・木活字印本)



す。宋代には、さらに『統一切経音義』というものが10巻、希麟という人によって編輯されておりますが、中国に倣って日本でも『大般若経音義』『法華経音義』など各種の音義類が作られております。それから10世紀の初め頃には、梵語と訳語の統一をめざす関係上、訳語の統一とか綴り字、音写の部分が多いわけですからどういう字を充てるかということもあります。綴り字の問題も含めて、中国における經典翻訳のための梵語辞典の如き書物も作られており、そうしたものを受け、大成した形で宋代には『翻訳名義集』といったものが編輯されております。仏典翻訳のための梵語辞書、手引書みたいなものですね。それから、仏典は膨大な数が中国に伝わっておりますので、唐の經典目錄であります『開元釈教録』にはおよそ1000部以上、1076部、5048巻の經典類が記録されているわけですが、俗に仏典5000巻と呼ばれている根拠というか、源というか、『開元録』のそれが大蔵經の經典数のひとつの基準巻数みたいになっておりますが、こういう膨大な經典類を内容的に仕分けしたような形、いわゆる類書、百科事典的なものも作られてきます。それが『経律異相』とか『法苑珠林』とか呼ばれるものであ

ります。梁の時代に宝唱らが『経律異相』というものを50巻編撰しておりますし、また唐の時代には道世という人が『諸経要集』20巻を編輯し、さらにそれに大幅に増補改訂を加えて『法苑珠林』(仏教ではハウエンジュリンではなくてハウオンジュリンといいます)が、) 100巻というものを作っております。また、そういう仏教全般ではなくて、ある用途に応じたもの、簡便なもの、たとえば『釈氏要覧』とか『大宋僧史略』といった便覧的なものも作られておりますが、そういう、「事柄を集めた」という意味で、『大正蔵經』では第53巻と第54巻になりますが、事彙部というところにそういうものが収められております。

そういうものが整います以前から經典類の解釈、注釈、そういうものは行われているわけですが、通例的にはお経は3つの段階から成り立っている。いわゆる序分、正宗分、流通分、この3つの部分に分かれているのが普通の形です。そういう段階を分けますのを、科段というふうに申しております。あるいは、分科ともいいますが、序分は最初の部分、普通のお経ですと「如是我聞」という言葉から始まりますが、何処で、誰に聞かせるために、

あるいは、誰の所望によって、これこれ、こういうふうの説く、聴衆はこれだけあった。場所と、その経が説かれるに至った由来、因縁を述べた最初の部分であります。正宗分が本論ですね。その經典の中心となる教説を述べた部分。最後に流通分になりますが、その経の功德を讃嘆する形で、人々に伝えて行く、流布することを希って後世での普及・流通を勧めるという形でお経が結ばれていくわけで、大体流通分が最後にあたりますが、このように三段階に分けて理解するのが普通であります。ところが、三段階でなくてさらに細かく分けて解釈するということも進んでまいりますので、そういう分科すること、分科したところがどういうこと、ここはどういうことを説いているか、その内容を標示した言葉を付けたりします。それを科文というふうにいますが、後にはそれが却って細かく分けすぎて、却って煩雑となり、文意が判らなくなってしまうという状況も生じるわけですが、分科・科文は4世紀、道安の頃から起り、南朝の齊・梁の時期に確立するのであります。それから、科段に分けるだけでなく、内容についてもっと詳しく註釈する、あるい

は解釈する、そういうことが出て来るわけですが、そういう形式といいますか解釈は、書名によってかなり窺えます。「何々玄義」とか「何々義疏」とかいう言葉が付いているものがしばしばあるかと思いますが、玄というのは奥深いという意味であります。玄義とかが付いているのは、その経全体を捉えて大要を述べるという形の解釈ですね。その經典の概論だとか、全体を把握した註釈書、特に天台宗なんかでは、色々な經典を解釈する際に、それに先立って経題の意味や、その経の要旨を論釈するのを玄義といたしたわけで、現在では智顛の『法華玄義』とか『金光明玄義』とか、玄義と名の付くものは沢山あるわけですが、その経全体の要旨を述べたものですね。玄義とか玄論・玄談とかいう語を書名に使います。ショ(=疏)という語もよく使いますが、大体は外典の方では註に対する註がソ(=疏)と呼ばれるものですが、漢籍の方ではソと読みますし、仏教の方ではショと読みますが、『法華義疏』とか、日本では聖徳太子の『勝鬘經義疏』とかございます。疏の語義は、疏通といいますか滞りを除いて通じさせることですが、先程の専ら経論の大意を論



『和字絵入 往生要集』

じた註釈書である玄義、玄論とか章、義章と違いまして、さらに丁寧に経論の本文のそれぞれの章句について、ひとつひとつ註釈を施す形が疏であります。また宗派の確立した唐中期以降には、日本でもそうですが、各宗派の祖師が著したものの、あるいはその人たちが拠り処としている書物の疏をさらに註釈したものを末疏と呼んでおりますが、盛んに作られました。そういうふうになりますと、註釈書、末疏の類は非常に数が多くなってきます。

そういう中味の話でなくて、仏書に見られる刊行形式といいますか、実際に見られる仏書の形態を見てみますと、経の本文に科文が加えてあるもの、あるいは註を合した合註本、本文とは別に用いられているいろんな註釈書を集めて、テキスト本文の各文節ごとに合わせて併記し、一本としたもの、それを会本というのですが、中国宋朝以降の刊行本にこの形式が多く用いられていますし、日本でも『日本大藏経』という大藏経がありますが、それもそれに類した形式といえますし、『仏教大系』という大きな叢書がありますが、それも会本の形をとっていますが、勉強する上では、いろんな種類の註が一所に集まっておりますので、便利な形態であります。単行で出版されます本では本文の頭、上欄にそういう註が書いてあるものがあります。頭註本とか首註本、首書き、頭書き、そういう呼び方もしますし、鼈頭と、難しい字が使っていますが、鼈とは大きな亀、大きなスッポン、海亀であります。中国では鼈頭というのは、高等官吏の試験にパスした首席及第者である状元、そういう人を指す言葉ですが、我が国では、書物の上欄に書き入れた註釈、標註、これを鼈頭といういい方もします。それから、仏書が庶民に流布してきますと、漢文のものを日本では和訳した形の本が出てきます。さらに、親しみ易いといいますか、絵巻物、絵伝なんかの流れを汲んでもいるんでしょう、絵を入れた、いわゆる絵入本というものも出てきます。人々には親しみ易いものですので、我々が使います『往生要集』とか『選択集』とかございますが、それにも『和字絵入往生要集』とか『ひらかな絵入選択集』というようなものも、いろんな版本が沢山出ておりま

す。さらには、語録とか仮名法語、あるいは談義本とか寺社縁起、靈驗記、和讃といった仏教文学的なもの、仏画、曼荼羅など仏教美術的なものも含めて、外観的なことから仏書に近づいていただく、あるいは慣れていただく手始めとして和漢仏書の特質といえますか、仏書の諸相をお話するつもりでございましたが、本題に入る前に時間が過ぎてしまいました。私自身準備不足でもありますが、十分な講義ができませんでしたが、もし今後もこういう機会が与えられますなら、もう少し的を絞った形で、細かい所に実務に役立つような話で、もしお役に立つようなことがあったら、またお願いしたいと思う次第であります。本日は纏まりのない甚だ雑駁な講義で、尻切れトンボに終わってしまいました。どうかお許しください。どうも失礼しました。

訂正とお詫び

本文中に以下の誤りがありましたので、訂正いたしますとともに、お詫び申し上げます。

頁・行	誤	正
P13 ㊦19~20	正宗分、 <u>通流分</u>	→ 正宗分、 <u>流通分</u>
P14 ㊦6	最後が <u>通流分</u>	→ 最後が <u>流通分</u>
P14 ㊦10	大体 <u>通流分</u>	→ 大体 <u>流通分</u>

第一回仏教図書館協会研修会

大蔵経の歴史とその構成〈講義Ⅱ〉

平塚 義澄 (龍谷大学大宮図書館・副参事)

2世紀半ばの後漢の時代に仏教は、インド、あるいは西域から中国に渡って来られた渡来僧や、中国より命をかけてインドに渡って、仏典を求めて旅された求法僧によって、中国への道が開かれていきました。

さて、仏教を説かれたお釈迦様（お釈迦様のことを世尊とも呼びます）は、ペーサリーの郊外で最後の教えを説かれました。その最後の教えの中で、「自らを燈明（灯）とし、自らに帰依し、他に帰依してはならない。法を燈明（灯）とし、法に帰依し、他に帰依してはならない」とお説きになられました。やがて、仏陀（世尊）の遺教という形でお釈迦様の最後の戒めとして「これまでに説いてきた教え（法）こそ、おんみらの師である。教えのとおり道を修め、怠りなくつとめるがよい」というお言葉が残されています。（補足ですが、お釈迦様が入滅に際し、仏弟子の大迦葉とその一行がその悲しい知らせを受けて、馳せ参じました。その時に、大迦葉の一行の中に「あっ、これで自分達も楽になった」という弟子が早くも生まれてきたと伝えられています。）そこで、お釈迦様の教えを正しく伝えなければならないと、仏滅後ほどなくして第一結集という形で、最初の結集が開かれました。

第一結集についてのことですが、最初は経＝いわゆるお釈迦様の教えですね。教えと、そして、僧伽（僧侶の集団）あるいは、僧侶としての戒律が整理されていきました。具体的には、いつもお釈迦様の身の回りをお世話した「多聞第一」といわれた阿難尊者が、事実、自分がお聞かせいただいたお釈迦様の教えを多くの弟子の前で誦出します。そして、

その場に集まった仏弟子たちがそれを聞き、正しければもう一度、合わせて復誦します。それを合誦といいます。こうして、当初は、書写ではなしに口から口へと口伝されていたと伝えられています。その後、第二、第三結集が開かれますと、時代も滅後200年を過ぎ口伝による法の伝持も難しくなってきました。戒律も乱れてきます。そして、ようやく仏典として書きとどめられる時代を迎えるようになります。

紀元前後に、アショカ王とかカニシュカ王が世に出られて、仏教の混乱が是正され、正しい仏教が守られていくことになりました。2世紀頃には、第四結集が開かれて論蔵が編纂され、経・律・論の三蔵が確立しました。かくして仏教は上座部系といわれる、長老方を中心とした部派系により南方仏教として伝えられ、やがて、「パーリ語三蔵」の成立に至ります。

「大蔵経」は、経・律・論という順で編纂されていますが、「パーリ語三蔵」は、律蔵が中心で、一が律蔵、二が経蔵、三が論蔵、律・経・論の順で、構成されています。その後時を隔てて、高楠順次郎監修の下、日本で『南伝大蔵経』が刊行されました。

ところで、大谷大学図書館から頂戴しました『書香』（第14号）に、貝葉についてその作り方、並びに経緯が述べられていますが、インドではその貝葉に、当初は口伝だったのですが、貝多羅葉（ターラ）の樹皮に書いて、書きとどめておく経典が生まれてきました。そもそもインドは、文字そのものは身体にとどめておくことの方が神聖である。身体にとどめておくという思想がありました。中国は

文字による記録を大切に作る国であります。

やがて貝葉經典は雪山、シルクロードを通過して、中国へと渡っていきます。一方、インドへ渡って行かれた方々を入竺求法者（竺とは天竺のことで、インドの古い呼び方のひとつです。）といいますが、その一人法顕は、紀元後399年、60歳の頃、求法の旅で中国から天竺へ仏法を求めて行かれました。その記録を伝える『法顕伝』には「熱風に遇へば、則ち皆死して……」と記されていて、皆大変な気候と過酷な自然条件の中で命を失っていかれました。空には飛ぶ鳥もなく、地には走る獣さえいない、という非常に困難なところでありまして、唯だ死人の標識を見るのみであったと書かれています。

かくして、經典が翻訳される時代を迎えます。その先駆けは、安息国という西域の国の安世高（後漢の148年洛陽にて帰化）という方です。この方が仏典を翻訳された最初の方でありました。以来、經典の翻訳が後漢の時代から元代に至るまで、1200年から1300年の永きにわたって続けられていきます。

漢訳の「大蔵經」ができるには、まず、インドとは全く異なる言葉に置き替えていくという翻訳をしなければなりません。そういう意味でこれは大変な労苦と費用を必要としました。具体的には、後漢の時代からずっと訳經の時代が続きますが、インド・西域から来られた方を渡來僧、中国からインドへ行かれた方を求法僧という形で伝えられていきます。

翻訳の時代にも、時代区分があり、①古訳時代、②旧訳時代、③新訳時代に区分されています。法顕は古訳の時代に当たり、旧訳時代の代表は鳩摩羅什で、新訳時代の代表は玄奘です。唐の時代、玄奘は本来の読み方とか、もう一度自分の身体で知りたくと、自らインドに求法の旅に出て、沢山の經典を持って帰り、新しい訳し方を試みました。龜茲国出身の鳩摩羅什（4世紀後半）は、もともとインドの血を受けた方と伝えられています。訳經僧、經を訳される方の多くは、中国ではなしに、西域からインドにまたがる地域の方であり、中国語、漢語を勉強しながら經典を訳していかれました。

次は、「經典目録」についてであります、

漢訳經典目録のことを「經録」と略称されます。大谷大学図書館長の木村先生から詳しくご説明のありましたが、その端緒は、道安の『綜理衆經目録』、即ち『道安録』のことで、南北朝初期の僧・道安は仏図澄に師事して、大変なご苦勞をされました。これまでの仏教の理解が「格義仏教」即ち、中国思想を媒介にした理解にとどまって、決して正しい仏教理解ではなかった故に、道安はあらゆるものを集めて、真義の把握に努められました。そして、一方では弟子の育成にも力を注がれ、中国仏教発展の基礎を固められました。その『道安録』は現存せず、僧祐の『出三藏記集』にその姿を見ることができるといわれています。その構成は、先ず①インドにおける經・律・論の撰述記録（緣起）。②經典・經名目録（經録）。③中国人による經典に対する序文。④訳經者の列伝（伝記）。⑤法集目録となっています。この經録には、中国出来の偽疑經典が經として記録されています。また、初期の經録は一切經の意味で「衆經」と名付けられています。

次いで『大唐開元釈教録』。唐の時代の「經録」の中心になります。新訳時代の幕開けとして玄奘三蔵が自らインドより沢山の經典を持ち帰り、新たな經典の流入を通して、やがて道宣の『大唐内典録』が作られ、「釈教録」が編まれていきます。この時代の經典の分け方は、隋の時代に入って大乘・小乗の区分けが「大乘修多羅藏」、「小乘修多羅藏」という形で区分されています。即ち、大乘・小乗が明確に分けられていきました。かくして、經典の目録によって、今まで訳された沢山の經典が整理され、かつ散乱を防いでいくことになりました。經典の数も、唐の時代には2000を超える部数と8000を超える巻数が記録されています。

続いて、智昇の『開元釈教録』の構成に少し触れてみましょう。ここで、注目されるのは、配列です。今日の大蔵經典のあらゆるもの、經録もそうですが、經典の目録構成はこの『開元録』を範としています。先ず般若部から始まり宝積部、大集部、華嚴部、涅槃部、と五大部に区分され、その巻数は5048巻。世に「藏經5000巻」と通常称されるようにな

りました。そして律、伝記と続きます。聖賢伝といいまして、西土撰述分と此土撰述分とに分かれています。此土は、中国のことですが、かくして基本体系ができてきました。そして、經典に対する正偽の判断も加えられ、経録を以て、書写による欽定の大蔵経が生まれる素地ができて上がりました。

先にも触れました代表的訳経者についてありますが、古訳時代の代表は、安世高とか竺法護、それから釈法顕です。鳩摩羅什から始まる旧訳時代では、鳩摩羅什とか曇無讖とか梁の時代に僧祐が出てきます。真諦は海を越えて中国に渡来しました。その一人、菩提流支について少し述べてみましょう。北魏の時代に曇鸞という浄土教にとっては非常に名高い方がおられました。この北魏の時代は、非常に乱れた時代といわれています。そのような時代の中で、曇鸞大師は自身が病床の身であっては仏法を学ぶことができないということで、長生不死の道を求め、仙術の法を持しての帰り道で菩提流支に出会い、仙経を焼き捨てました。そして浄土經典を授かり真実の仏教に目醒めて行かれました。

そのことを親鸞聖人は

「本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしへにて
仙経ながくやきすてて 浄土にふかく帰せしめき」(『三帖和讃』)

と和讃にされました。

そして、次の新訳時代には唐代を代表して玄奘や義浄が登場します。

さて、中国では紀元後2世紀初頭の後漢の時代に蔡倫という方によって、紙が発明され、書写の時代を迎えるようになります。いわゆる、写経の流布です。そんな時代も相俟って、仏教は書写隆盛の時代を迎えますが、やがて書写から開版、いわゆる印刷の時代を迎えます。大蔵経の印刷については宋の時代からと聞き及んでいます。

先にも触れましたが、唐代の『開元釈教録』に基づいて大蔵経が整理されて行きます。先ず、般若部から始まり、帙という容れものに納まるのですが、その帙には今の番号に替わって、いわゆる「天地玄黄」から始まる「千字文」が振られています。

「蜀版」即ち「北宋版」は、太祖の972年に

雕造を開始、11年の歳月をかけて完成した最初の開版大蔵経で宋代の国家事業でありましたので、勅版といえます。この宋朝の時の皇帝は非常に心の大きな人だったのでしょいか、仏教国である近隣国にそれを贈呈しています。それが西夏という国であったり、高麗という国に渡ったり日本にも贈与されたと聞いております。ところで、日本では、東大寺の奄然という方によって齎され、藤原道長の法成寺の経蔵に安置されたのですが、それが焼かれてしまい、僅か京都の南禅寺に保存されていると伝えられています。「蜀版」そのものは、金国の軍が攻めてきて都市が陥落します(1126年)。そして、經典もろとも灰燼に帰し、宋朝の終わりと運命を共にすることになりました。なお、蜀版は僅かに京に残ったもので、一端を知られるわけではありますが、幸いなことにその遺風は西夏、高麗に引き継がれ、大蔵経が編まれていきました。

次は私版ですが、「福州版」、福州というところで、2本あります。東禅寺本と開元寺本です。一行17字で作られています。当初、唐代では書写は14字でありましたが、17字になっています。折本による刷り本です。それから、同じく南宋版で、「思溪本」、思溪という言葉が使われていますが、これは、豪族の王永従という篤信者によって開版されました。しかし、蒙古軍の兵火(1276年)を浴びて、経板の全てが焼失してしまいました。

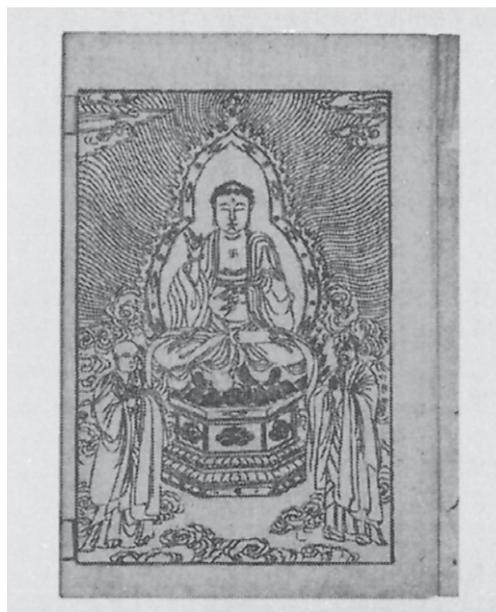
そして、「磧砂版」。これも有名です。宋から元代にわたって完成したと伝えられていますが、これは、磧砂という土地の名前にちなんで磧砂版と名付けられました。一行17字の摺帖形式で、南宋のいわゆる「思溪版」の流れを受けていると窺っています。

続いて、「普寧寺版」ですが、寺の名前を以て大蔵経の名前にされています。道安らによって開版されました。「思溪版」の継承を受けていまして、当時の庶民教団でありました白蓮宗に関わりのある大蔵経です。土地の人々の喜捨とか、様々な形で編まれました。やがて日本に伝わり、『縮刷蔵経』、『大正新脩大蔵経』等の校訂に使われます。勿論、先程の「思溪版」は、「天海版」の底本にもなりました。

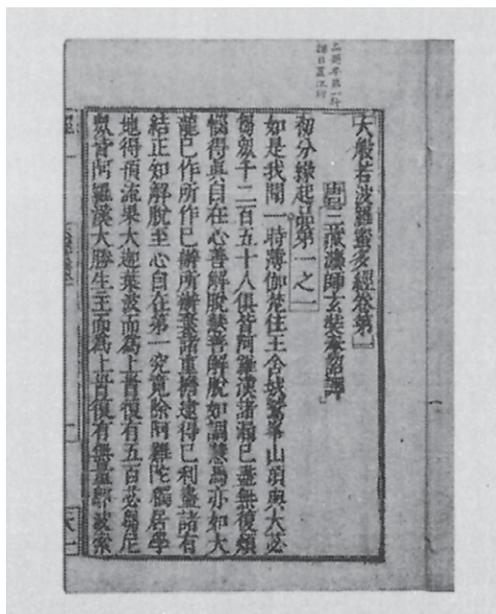
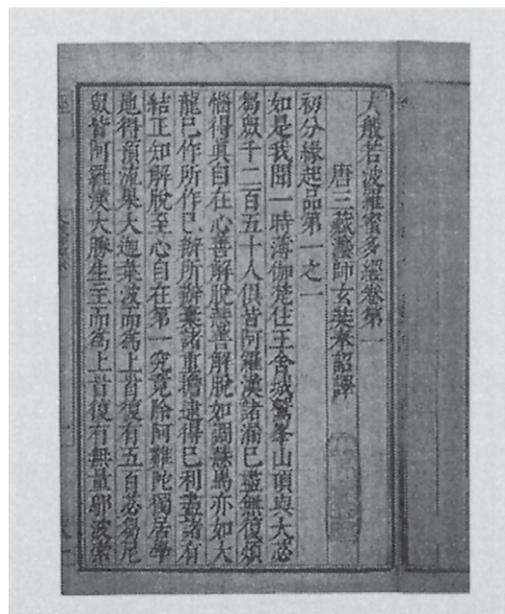
万曆版と鉄眼版の比較

万曆版

鉄眼版



(扉 絵)



(大般若波羅蜜多經)

※万曆版、鉄眼版、いずれも大谷大学蔵本
鉄眼版朱筆書入れは丹山順芸師による校訂

次に、隣接国についてであります。そこでの大蔵経は兵火で灰燼に帰した「北宋版」の流れを受けています。というのは、宋の朝廷が近隣国に与えられ、それを基に「契丹版」、「女真版」（「金国版」ともいいます）が生まれてきます。そして、いよいよ高麗版ですが、2回ありまして、「初雕本」については、高麗の韓彦恭が入宋して一蔵を持ち帰り、自国での国威発揚の立場から作られました（1011年）。といいますのは、高麗という国は、たびたび他国から攻められて、国の困難は大変なことでした。それを仏教で以て国を再興しようということで、この大蔵経が作られたと伝えられています。一行の字数は14字の摺帖で焼失した北宋の系統を引いていましたが、その「初雕本」もまた異国が攻めてきて（1232年）、灰燼に帰し、経板の全てを焼失しました。しかし、それにめげずに再び「再雕本」という形で民衆の悲願の下、国を挙げて雕造、16年の歳月をかけて1251年完成しました。この「再雕本」が今日非常に大きな役割を果たしておりまして、いろんな大蔵経の底本になりました。海印寺というところに所蔵されましたので、『海印寺版大蔵経』とも呼ばれています。

明代に入りますと、大蔵経に南と北の流れがあります。「南蔵本」、「北蔵本」で字数は17字です。なお、「北蔵本」は「思溪版」の流れを受けています。

そして「万曆版」ですが、龍谷大学にも万曆版が所蔵されています。字数は17字でも14字でもなしに一行20字詰め、袋綴の冊子本になっています。それが、やがて日本へきて、鉄眼版＝黄檗版として引き継がれます。

清代に入って龍蔵ですが、万曆版でなくて北宋本の流れを受けていまして、清蔵また龍蔵と呼ばれています。一行17字詰め摺帖の勅版です。大谷大学、あるいは龍谷大学にも納められており、京都大蔵会50周年目にして目録が作られました。大型の帙入で「千字文」で以て排架されています。

『頼伽版大蔵経』というのは、これは、今までは中国、インドから中国、中国から日本という流れでありましたが、この「頼伽版」というのは、実は中国から日本へ渡ってきて、

日本で作られた大蔵経が、今度は逆に、中国に逆輸入されて作られました。

最後に、日本の大蔵経についてです。先ず「天海版」ですが、寛永期の頃始まりました。宋朝体の文字で「思溪本」を底本にしています。折帖で、料紙は和紙が使っておりまして、西本願寺の経蔵に納められています。

次に「鉄眼版」ですが、中国の明の時代に作られた「万曆版」を模して彫られ、「被彫」と称される覆刻です。鉄眼禪師の発願（1668年 禪師39歳）により開板（版）されたので鉄眼版と呼ばれたり、黄檗山万福寺の黄檗谷、黄檗という名前から「黄檗版」とも呼ばれています。数十年の月日をかけて作られまして、袋綴の冊子になっています。

明治期になり、『縮刷蔵経』（華嚴部を最初に配する構成で、国内最初金属活字版蔵経）、『卍蔵経』（句読訓点を付す）、『卍続蔵経』（日本以外の未収録を多く収める）を経て、大正の時代から昭和にかけて『大正新脩大蔵経』が刊行されるに至りました。その編纂にはパーリ本や梵本も参照され、かつ阿含部を最初に配列する学術的構成がとられています。なお、華嚴・方等・般若・法華・涅槃の順序で構成されている『縮刷蔵経』、阿含部を最初に提示した学術的構成からなる『大正新脩大蔵経』等の分類、組織については、大谷大学図書館の横田先生が詳しくご講説いただいているところです。

この度の研修に際し、大谷大学図書館のご好意で「黄檗版」並びに「万曆版」を展示いただきました。両者を比較いただきながら、被彫の技術に触れていただき、ご苦勞の跡を偲んでいただければと思う次第であります。

【参考1】千字文

天地玄黄(てんちげんこう)	宇宙洪荒(うちゅうこうこう)	日月盈昃(にちげつえいそく)	辰宿列張(しんしゅうれつちやう)
寒来暑往(かんらいしゅわう)	秋收冬藏(しゅうしゅうとうぞう)	閏余成歲(じゅんよせいさい)	律呂調陽(りつりょうちやうやう)
雲騰致雨(うんとうちう)	露結為霜(ろけつゐそう)	金生麗水(きんせいれいすい)	玉出崑崗(ぎょくしゅつこんこう)
劔号巨闕(けんごうきょくけつ)	珠称夜光(しゅしやうやこう)	菓珍李奈(かぢんりない)	菜重芥薑(さいじやうかいきやう)
海鹹河淡(かいかんかたん)	鱗潜羽翔(りんせんうしやう)	龍師火帝(りゅうしかてい)	鳥官人皇(ちゅうかんじんこう)
始制文字(しせいもんじ)	乃服衣裳(ないふくいしやう)	推位讓国(すいじやうこく)	有虞陶唐(ゆうととう)
弔民伐罪(ちやうみんばつざい)	周發殷湯(しゅうはついんとう)	坐朝問道(ざちやうもんどう)	垂拱平章(すいこうへいしやう)
愛育黎首(あいりくしゅ)	臣伏戎羌(しんぷくじやうきやう)	遐邇壹体(かじいつたい)	率寶婦王(すつひんきさう)
鳴鳳在樹(めいほうざいじゅ)	白駒食場(はくこしじやう)	化被草木(かひそくもく)	頼及万方(らいきつばんぱう)
蓋此身髮(がいしんぱつ)	四大五常(しだいごじやう)	恭惟鞠養(きやういききやう)	豈敢毀傷(きかんだいしやう)
女慕貞紉(じよぼていけつ)	男効才良(なんこうさいりやう)	知過必改(ちかひつがい)	得能莫忘(とくねいぼう)
罔談彼短(わうたんひたん)	靡恃己長(みじちやう)	信使可覆(しんしかふく)	器欲難量(きよくなんりやう)
墨悲糸染(ぼくひしぜん)	詩讚羔羊(しさんかうやう)	景行維賢(けいこういけん)	剋念作聖(くねんさくせい)
德建名立(とくけんめいりつ)	形端表正(けいたんひやうせい)	空谷伝声(くうくでんせい)	虛堂習聽(きょどうしゅうてい)
禍因惡積(かゐんあくせき)	福緣善慶(ふくえんぜんけい)	尺璧非宝(せきへきひぼう)	寸陰是競(すんいんしけい)
資父事君(しふじくん)	曰嚴与敬(いっげんよけい)	孝当竭力(こうたうけつりきく)	忠則尽命(ちゅうそくじんめい)
臨深履薄(りんしんりはく)	夙興溫清(しゅくきやうおんせい)	似蘭斯馨(じらんしんけい)	如松之盛(じよしやうしせい)
川流不息(せんりゅうせき)	淵澄取映(えんじやうしゅえい)	容止若思(りやうしじし)	言辭安定(げんじあんてい)
篤初誠美(とくしゅせいび)	慎終宜令(しんしゅうぎやうれい)	榮業所基(えいぎやうしよき)	籍甚無竟(せきじんむきやう)
學優登仕(がくゆうとうし)	撰職從政(せんしやくじやうせい)	存以甘棠(ぞんいかんたう)	去而益詠(きよえきえい)
樂殊貴賤(がくしゅきせん)	禮別尊卑(れいべつそんひ)	上和下睦(しやうわかぼく)	大唱婦隨(たいちやうぶずい)
外受傳訓(がいじゆふくせん)	入奉母儀(にっほうぼぎ)	諸姑伯叔(しよこはくしゅく)	猶子比兒(ゆうしひに)
孔懷兄弟(こうゐいけい)	同氣連枝(どうきれんし)	交友投分(こういうとうぶん)	切磨箴規(せつまきぎ)
仁慈隱惻(じんじいんそく)	造次弗離(ぞうじふり)	節義廉退(せつぎれんたい)	顛沛匪虧(てんぱいひき)
性靜情逸(せいせいせいいつ)	心動神疲(しんどうしんひ)	守真志滿(しゅしんしまん)	逐物意移(しゆくぶついつ)
堅持雅操(けんじやそう)	好爵自縻(こうしやくじび)	都邑華夏(とゆうかか)	東西二京(とうせいにけい)
背芒面洛(はいぼうめんらく)	浮渭拋涇(ふゐきやうけい)	宮殿警鬱(きゅうてんけいふ)	樓觀飛驚(りゅうくわんひきやう)
罔寫禽獸(わうしやうきんじゆ)	画綵仙靈(かさいせんれい)	丙舍傍啓(へいしかぼうけい)	甲帳對楹(けいじやうたいえい)
肆筵設席(しせんせつせき)	鼓瑟吹笙(こしつさいせい)	升階納陛(しやうかいなべい)	弁輦疑星(べんねんぎせい)
右通広内(ゆうつうこうだい)	左達承明(さたつじやうめい)	既集墳典(きしゅうふんてん)	亦聚群英(いっくわんぐんえい)
杜稟鍾鏗(とらうしやうけい)	漆書壁經(しつしよへきけい)	府羅將相(ふらしやうしやう)	路俠槐卿(ろけいけい)
戶封八景(こほうはつけん)	家給千兵(かきゅうせんべい)	高冠陪輦(こうかんぱいべん)	駭駭振纓(かいはいしん)
世祿侈富(せりくしよふ)	車駕肥輕(しやうけい)	策功茂實(さくこうもじつ)	勒碑刻銘(れくひこくめい)
磻溪伊尹(ばんけいいん)	佐時阿衡(さじあこう)	奄宅曲阜(えんたくきやくふ)	微且執管(ゐんじしゅくかん)
桓公匡合(かんこうきやうごう)	濟弱扶傾(けいじやくふけい)	綺迴漢惠(きかいかんけい)	說感武丁(せつかんぶてい)
俊乂密勿(しゅんいみつぶつ)	多士寔寧(たしじしやうねい)	晉楚更霸(しんそこうは)	趙魏困橫(ちやうぎこんかう)
仮途滅虢(かどめつかく)	踐土會盟(せんどかいめい)	何遵約法(かじゆんやくほう)	韓弊煩刑(かんへいはんけい)
起翦頗牧(きせんはんぼく)	用軍最精(ようぐんさいせい)	宣威沙漠(せんいさばく)	馳登丹青(ちてんたんせい)
九州馬跡(きゅうしゅうまじき)	百郡秦并(ひやくぐんしんへい)	嶽宗恒岱(がくそうこうたい)	禪主云亭(ぜんしゆんてい)
雁門紫塞(がんもんしさい)	鷄田赤城(けいでんせきせい)	昆池碣石(こんちけつせき)	鉅野洞庭(きよのうてい)
曠遠綿綿(くわうえんめんめん)	巖岫杳冥(がんしゅうやうめい)	治本於農(ちほんのう)	務茲稼穡(むしやく)
俶載南敵(しゅくさいなんてき)	我芸黍稷(われいしよしよく)	稅熟貢新(ぜいじゅくこうしん)	觀賞黜陟(くわんしやくちつしやく)
孟軻敦素(もうかどんそ)	史魚秉直(しぎよへいちやく)	庶幾中庸(しよきちゆうちゆう)	勞謙謹勅(らうけんきんしやく)
聆音察理(れいおんさつり)	鑑貌辯色(かんぼうべんしやく)	胎厥嘉猷(たいくわくかお)	勉其砥植(めんきしやく)
省躬譏誡(せいこうきがい)	寵增抗極(ちゆうぞうかうきやく)	殆辱近恥(たいじやくきんち)	林皋幸即(りんこうしやく)
兩疏見機(りやうしゆけんき)	解組誰逼(かいそすいひつ)	索居閑處(さくきうかんじよ)	沈黙寂寥(しんもくせきりやう)
求古尋論(きゅうこじんろん)	散慮逍遙(さんしよしやうりやう)	欣奏累遣(きんそうるいけん)	感謝鞠招(かんだいしやく)
渠荷的歷(きよかてきれき)	園莽抽条(えんぼうしゅちゆうじやう)	枇杷晚翠(ひばばんすい)	梧桐早彫(きとうしやうちゆう)

- | | | | |
|-----------------|-------------------|-----------------|-------------------|
| 陳根委騎(ちんこんい) | 落葉飄飄(らくようひょうひょう) | 遊鶻獨運(ゆうこくどくうん) | 凌摩絳霄(りょうまこうしやう) |
| 耽耽耽市(たんたんたんし) | 寓目囊箱(ぐもくのうしやう) | 易輜攸畏(いしゅうけい) | 厲耳垣牆(れきじえんしやう) |
| 具膳餐飯(ぐぜんさんばん) | 適口充腸(てきこうじゅうちやう) | 飽飫烹宰(ほうじくほうさい) | 飢厭糟糠(きえんそうこう) |
| 親戚故旧(しんせきこきゅう) | 老少異糧(らうしやういりやう) | 妾御續紡(しやうぎよせきほう) | 侍巾帷房(じきんいぼう) |
| 紈扇員潔(かんせんえんけつ) | 銀燭煌煌(ぎんしやくきやうきやう) | 昼眠夕寐(ちゅうみんせきび) | 藍筍象床(らんじゆんしやうじやう) |
| 絃歌酒讌(げんかしやくえん) | 接杯孿鶻(せつはいしやうしやく) | 矯手頓足(きやうしとんそく) | 悅予且康(えつよじきやう) |
| 嫡後嗣統(てきごとしきう) | 祭祀蒸嘗(さいしじやうしやう) | 稽顙再拜(けいそうさいはい) | 悚懼恐惶(しゆくきやうきやう) |
| 牋牒簡要(せんだくかんやう) | 顧答審詳(ことうしんしやう) | 骸垢想浴(かいこうしやう) | 執熱願涼(しつねつがんりやう) |
| 驢騾犢特(ろろとくとく) | 駭躍超驥(がいやくちやうじやう) | 誅斬賊盜(ちゅうざんぞくとう) | 捕獲叛亡(ほくはんぼう) |
| 布射遼丸(ふしやうりやうかん) | 嵇琴阮嘯(けいきんげんしやう) | 恬筆倫紙(てんひつりんし) | 鈎巧任鈞(こうこうじんちやう) |
| 積粉利俗(しやくふんりぞく) | 並皆佳妙(へいかいけみやう) | 毛施淑姿(もうししゆくし) | 工嫵妍笑(こうひんけんしやう) |
| 年矢每催(ねんまいさい) | 羲暉朗曜(ぎきりやう) | 旋璣懸幹(せんきけんあつ) | 晦魄環照(はいはくかんしやう) |
| 指薪脩祐(ししんしゅうゆう) | 永綏吉劬(えいすいきつしやう) | 矩步引領(こほいんれい) | 俯仰廊廟(ふぎやうらうびやう) |
| 束帶矜莊(そくたいきやうそう) | 徘徊瞻眺(はいかいせんちやう) | 孤陋寡聞(ころうくわぶん) | 愚蒙等誚(ぐもうとうしやう) |
| 謂語助者(いごじしやく) | 焉哉乎也(えんさいこや) | | |

【参考2】大藏經關係図表

